

# 春間近★節分に賑わう



▲「大丈夫ですか～？施設長～」みんな笑顔で見守ります。(巻寿司)

## ふくろう新聞

<発行>  
特別養護老人ホーム  
淡路ふくろうの郷  
広報委員会  
洲本市中川原町  
中川原28番地1  
TEL:0799-25-8550  
FAX:0799-25-8551  
ホームページ  
<http://www.normanet.ne.jp/~hyoufuku/>



お点前、ちょうだいいたします・・・

開所以来、行き来し、交流を重ねた淡路高校一宮分校が、残念ながら今年度で閉校になります。閉校を前に、生徒さんのお茶とお琴で、お互いに感謝し合いました。

### 淡路一宮分校と交流

2月3日は巻寿司・豆まき・カクテルバーに、お茶・お琴、行事が満載でした。

立春を迎え、暦の上では春になりました。一昔前は、家の中心からみて鬼門の方角に桃や桜、南天などの木を植えて厄除けを願っていました。この木の手入れや伐採などを「節分」に行うと良いといわれています。

◆藤本紀代さん (70歳・盲ろう)  
「参加できて良かったです。通訳の人が、海苔に寿司米を付ける範囲

節分の日には、炒った豆を年神に供え、その豆で「豆まき」を行います。豆は「魔滅(まめ)」に通じ、無病息災を祈る意味があります。

◆寺岡初枝さん(99歳)  
「お茶、お琴、みなさん上手でした。私も昔、一通り教えてもらったけれど忘れてしまいました。楽しめました。」



ボランティアさんと一緒に琴に触れる先山さん(98歳)

を示してくれて助かりました。味も良かったです。昔、松阪市の家で、亡き母と巻き寿司をしながら、懐かしくなりました。」



鬼に扮した西田さん。それを手で感じる藤本さん(左)

### ふくろうバー開店

「レモンフィズを飲みました。栗栖さんの作るカクテルはどれもおいしい！でも、お酒と一緒に何か食べるものがあればもっと良かったかな。」

◆黒崎時安さん(81歳)



# 入所者紹介

## 伊藤照子さん

照子さんの息子さん、娘さんにお話しをうかがうことができました。



学生時代の照子さん(左)

母は大正15年2月17日、大分県の湯布院の近くで生まれました。現在86歳。4姉妹の3女です。高熱が原因で3歳頃に聞こえなくなりました。

花ユニットの山口頭蔵さんの奥様の哲子さんとは、大分のろう学校で一緒だったことがきっかけで今も交流が続いています。(ふくろう新聞52号参照)。

母は24歳で結婚。父もろう者でした。子供は私達二人。父母との会話は唇の動きを読む「口話」と手話でした。手話は自然に覚えました。

昭和37年、母が39歳の時に、家族で母の友達を頼って尼崎に出て来ました。父は体が弱く、家計は母が支えていたようなものでした。

母は製本会社で紙の裁断の仕事をしていました。とても働き者で、無遅刻無欠勤。優秀な職人でした。社長からの信頼も厚く、会社が移転する際も「是非、来てほしい」と誘われ、定年まで勤め上げました。

母は友達とのおしゃべりや、旅行が大好きで、ろうあ協会婦人部の行事などに哲子さんとよく参加していました。

11年前に父と死別してからは、引越しをして、私の住むマンションの隣の棟で暮らしていました。

しかし、平成17年、自宅で滑って転んだ拍子に左肩を骨折してしまい、それをきっかけに体がだんだん弱くなり、入院になってしまいました。付き添っていた私が、いつものように病

棟のエレベーターを降りると、看護師さんの大きな怒鳴り声が聞こえてきました。「食べなさい！」怒られているのは母でした。看護師さんはマスクをしています。私はすぐに駆け寄り、「母は耳が聞こえないんです！話す時はマスクを外してください！」と訴えました。しかし、看護師さんはその意味を全く理解してくれず、「嫌なら出て行ってもらって結構なんですよ！」という言葉が返ってきました。本当に悔しくて、悲しくて、私は涙が止まりませんでした。

この時から母の様子がおかしくなり、常に不信感、恐怖感を抱き、いつも「怖い怖い」と言うようになりました。

同じ年の11月、母は尼崎の老人保健施設に入



ろうあ協会の旅行(下列中央)



息子さん、娘さんと一緒に☆

所します。入所したばかりの頃は、まだ母は自分で動きましたので、周りの方々に話しかけに行っていたのですが、みなさん、コミュニケーションの難しい方々が多く(手話が分からないという意味ではなく)、そうこうしているうちに母自身の体調も落ちてきてしまいました。そんな時、哲子さんの娘さん、隆子さんから、「もうすぐ淡路ふくろうの郷が開所するよ。うちの父が入所するんだけど、照子さんもどうかかな？」との誘いを受けました。私は即、入所を決めました。隆子さんから話しを聞くまで、ふくろうの郷のことも、京都のいこいの村のことも全く知りませんでした。

ふくろうの郷に入所で

きて本当に良かったと思っています。自分が子供を持ち、初めて両親の偉大さが分かりました。耳が聞こえなければ、赤ちゃんが泣いていることも分かりません。子育てにどれほどの苦労があったかと想像すると、育ててくれて本当にありがとうと、今は感謝の気持ちでいっぱいです。

照子さんのふくろうの郷での暮らしも6年目を迎えようとしています。ユニットのみんなが照子さんのことを気にかけてくれていて、何かあれば、「伊藤さんが！」と職員に知らせてくれます。いつもどんな時も「ありがとう」と感謝の気持ちを表してくださる照子さん。私たちも見習いたいです。

もうすぐ春がやって来ます。春は、お花見や地域の春祭り、よもぎつみ等々、いろんな行事があります。またみんなで出かけましょう。

生活援助員・涌井武一

# 魅惑に変身!?メイクアップ講座



嬉しそうな富永さん

1月18日、4名の女性職員が中心となって女性入所者に「メイクアップ講座」を開きました。

この企画は以前一人の入所者の方に対して化粧対応をすることがあり、その方が鏡に映る自分の顔を見て「まあ綺麗」とことばが出て嬉しそうな表情をされたことがありました。

このことがきっかけとなり「普段化粧をされていない他の女性の方にも化粧を誘ってみてはどうか」と企画しました。

「綺麗になったのだから、ぜひ外出を」との声があり、午後から喫茶店でおしゃべりを楽しんできました。

## ◆職員の声◆

**上田** 「化粧することが何年振り、何十年振りという方もいらしたと思えます。涙を流して喜ばれる新居さん。化粧が落ちないようにとおちよぽ口になってお昼の食事をされる吉田さん。鏡の前から離れない畠さん、富永さん。みなさんに喜んでいただけました。」

**小椋** 「今回、お化粧のお手伝いをさせていただき、みなさんの『魅惑の変身』を『目の当たりにしました。女性はいくつになっても女性なのです!』」



鏡を見つめる辛嶋さん

**加藤** 「以前は毎日お化粧されていたのかな?と思うくらい、慣れている方もいらつしやいました。ふくろうの郷に来られて初めてお化粧された方は、鏡を覗いたとき、嬉しいような恥ずかしいような顔をされていました。」

**小林** 「お化粧後、一番驚いたのは、いつも消極的だと思っていた吉田さんが進んで外出に参加されたことです。おしゃべりをする外出したくなるのはいくつになっても同じなのだ、と改めて思いました。いつも手芸等では参加できない方や、ほぼ寝たきりの方も参加できたことが嬉しく思いました。」



喫茶店での吉田さん

## リレーエッセイ

### 評議員・岩林恵子

今、ふくろうの郷では、たくさんの方々が楽しく過ごされています。それは職員も入居者も「手話でコミュニケーションを取ることでできる施設」ということがとても大きな理由であると私は思います。

以前は私と同じ稲美町に住んでいらした、ろうのご夫婦も、今はたくさんの方の形や手芸品等を作って販売されたり、ご自身の生い立ちを講演されたり、稲美で暮らされていた時よりも生き生きされています。そのような様子を見ると、稲美の会員が減るのは残念だったけれど、ふくろうの郷に入居のお勧めをして本当に良かったと思います。

夫妻とは、ろうあ協会やサークルの行事以外で関わることにはあまりありませんでした。しかし、ふくろうの郷への引越しのお手伝いをさせていただいた際、様々な手作

りの手芸品とその材料の多さに驚きと尊敬の念を抱きました。今も思う存分、ふくろうの郷で大好きな手芸をされています。

また、私の二人の娘が、ふくろうの郷の職員として働かせていただいていることで、淡路島に行く機会が増えました。遠かった淡路島も今は明石海峡大橋があるので近くなりました。

入居の皆さんや職員の方々と交流するために、これからもふくろうの郷へうかがいたいと思います。

淡路ふくろうの郷の発展のため、これからも応援していきます。いつまでも楽しく元気で過ごせる施設でありますように。



昨年11月の全聴福研にて。(前列左)

# 地域を語る

第26回

延命山・正法寺の縁起

(中川原町厚浜)

住職 井上義照

正法寺は、江戸時代前期の寛永年間(一六三〇年頃)に創建され、当時の幕府の宗教政策の一環として全国的にたくさん設置された檀家寺の一つです。寛文十三年の公文書にも当寺の名が見えます。厚浜地区(旧の細石村)の約六十戸余りの檀家寺で、地区の中央に建っています。

創建当時は、少し大きめの農家風の平屋で、わら葺きの簡素な建物で、地区の公会堂としても使われていました。その後、瓦葺きにするなどの修復も行われましたが、老朽化が進み、遂に平成十八年秋、檀家の総力で本堂は

一新されました。

ご本尊は地藏菩薩で、約三尺の木造立像です。元は寺の下の坂道(堂の坂)の小さなお堂に祀られていたのですが、霊験あらたかなため、元禄の頃(一七〇〇年頃)、それまでの本尊に代えて寺に移されました。特に、息災延命と病氣平癒のご利益に厚く、それゆえ「延命地藏」と呼ばれ、地区内外の多くの人々より親しまれてきました。眼光するどく、りりしきお姿の中に、やさしさをたたえ、まさに、どんな病気でも見通す一流の医者をしるばせませす。




正法寺 本堂

## 書籍のご案内

5月28日 発行予定

# 淡路ふくろうの郷



# 開所5周年記念誌

## 『地域で生きる暮らしをつくる』

「負けへんで！」  
～ Vol.4 ～

— 淡路ふくろうの郷物語 —  
(仮称)



B5版 DVD付  
約 200 ページ  
領価 1,500 円

## 第12回ふくろう学習会

講師は、洲本市五色町「たかたクリニック」院長、高田裕先生です。在宅ホスピス、往診活動等、地域医療の充実に活躍されています。

日時: 平成23年3月26日(土)  
午後3時30分～

講師: **高田 裕 氏**  
(たかたクリニック院長)

「往診活動から見てきた地域の課題」  
～ふくろうの郷に期待すること～(仮)



参加費: 500円

おのころの家心の俳句

がんばろう

水仙ながめて

おのころへ

(武内千代美 作)

もう水仙が咲いているのですね。  
おのころの家の送迎車を待ちながら、ふと思ったことを詠みました。



本屋で売っています。  
定価 950 円(税込)  
中央出版 2011.03 号

介護専門誌「おはよう21」の「おはようウォッチン」のコーナーに、淡路ふくろうの郷が紹介されました。



全4ページ。  
ぜひぜひ、ご一読ください。